

# 郷土室だより

## 切絵図考証 三

安藤 菊二

久松 町 (続き)

○佐藤捨藏

徳川時代末期の碩学、佐藤一斎先生である。

佐藤 一斎像

渡辺畢山画



「一斎は、安永元年（一七七二）十月江戸浜町の岩村藩邸で生れた。（岩村藩邸のことは後で記す）」

名は坦、字は大道、捨藏と称した。一斎はその号、居る所の楼を愛日楼といった。曾祖父広義（号周軒）、祖父信金、父信由（号文永）と、代々岩村藩の家老として藩政に参与した。

一斎は信由の次男であった。十九歳にして藩の士籍に登り、近侍の列に入り、藩主松平

乗瀧の第三子、述斎とともに学を修めた。

述斎は後に林家の養子となり、林述斎と称した人である。捨藏より四歳年長者で、まだ浜町の藩邸にあった。

一斎は、長ずるにおよんで、井上四明、高見星草の門に出入してその講論を聴き、二十二歳の時、林大学頭簡順の門に入り、初めて儒をもって業とするにいたった。勉学多年名声ようやく挙げ、林家の塾長となり、門生を監督するの任を帯び、育英の業にいそしんだ。天保十二年述斎が没したので、幕府は一斎を抜んで昌平黌の官舎に住して、儒官としてその任務を尽すように命じた。一斎が他界したのは安政六年九月、歳八十八。麻布の深広寺に葬った。

一斎はその時代の碩学で、学界の重鎮となっていたから、門人もすこぶる多く、佐久間象山・林鶴梁・大橋訥庵・安積良斎ら皆その門に学んでいる。

一斎は、藤原惺窩を尊崇し、惺窩のために、矢の倉の邸内に、小さな社を設けて、惺窩の肖像を懸けてこれを祀っていたという。（井上哲次郎）（平凡社版「大日本人名辞書」）

### ●一斎の矢の倉の私邸

高瀬代次郎氏の名著『佐藤一斎とその門人』に、次のような記事がある。

「一齋は天保十二年の初夏に日本橋浜町近くの矢の倉の屋敷を経始したり。

(中略)一齋は当年に齡古稀に達したりしかば、世事を謝絶して余生を養はんと欲し、岩村侯の矢の倉下邸の地、数百歩を借り、且書堂を新築して静修所といひ、又一樓を築きて東暖楼といひ、園に蕉桂を植ゑて隠棲の所とし、往来偃息したりき。「静修所」の額は今は河田龍翁の書齋に掲げたり。長約三尺、幅は之に半せる板面に、白字として刻したり。

翁の所談によれば、一齋先生の矢の蔵の屋敷は、最初は五百坪程にして、門は北にあり、建築は南向にしたり。玄関は六畳、次に静修所十畳、家族の居間八畳、別に四畳半あり。勝手は四畳三間、その他台所湯殿等あり。二階は東暖楼にして八畳、墨田川の景色も見えたり。

庭の中央に大なる池あり。その前に柳・芭蕉・百日紅・木犀等を植込みたり。庭を繞蕉園と称したるは、述齋の蕉園に近かりしが故なり。普通は矢の倉の屋敷と称し、五百坪程なりしが、後日に五百坪増し、合せて一千坪内外となれり。されど、その半は菊地淡雅の未亡人の隠居に貸したりき云々。その當時を想像するに足る。(中略)」  
天保十一年十一月二十六日、一齋は

儒員に擢んでられ、昌平費の官舎に居住することとなつた。そこで十二年二月八代洲河岸の旧邸を河田迪齋に譲つて昌平費内の官邸に移つた。しかるに弘化三年正月十五日、昌平費の官舎が災にかつたため、再度旧棲の地矢の倉の私邸に移り住むことになつた。

この時の一齋の口吟が、高瀬氏の前掲書に載せてある。ここにその一首を録す。

昌平学官邸、罹災今移在箭庫  
賜邸一、余旧構処、漫述五首。  
家遇ニ祝融ニ渾作レ墟。  
幸令レ不レ及ニ此池魚。  
鼠奔無レ恙鶏豚犬。  
携帶僅余琴劍書。  
坐聽私蛙了ニ公案一。  
來投ニ旧隱ニ做ニ新居。  
儘宜ニ暫遠ニ紅塵熱一。  
陋巷難レ容高蓋車。(前掲書、三六二頁)

一齋は僅に焼残つた何冊かの本を携えて旧棲の地へ移つたのである。

あり、宝曆三年八月、三、五〇〇坪を大岡出雲守に割き、文政十一年七月、四、三八三坪を水野出羽守に割き、残りの五〇〇坪は天保四年八月諏訪帶刀に渡して、邸地は解消した。一方、矢の倉の下屋敷は、坪数八六五坪あり、切絵図に、篠山立庵・幸五郎次郎・津田十蔵・佐藤捨藏・春田源蔵らの名を記す辺りが、その藩跡である。

○廻船方苦屋  
「弘化四年武鑑」に、

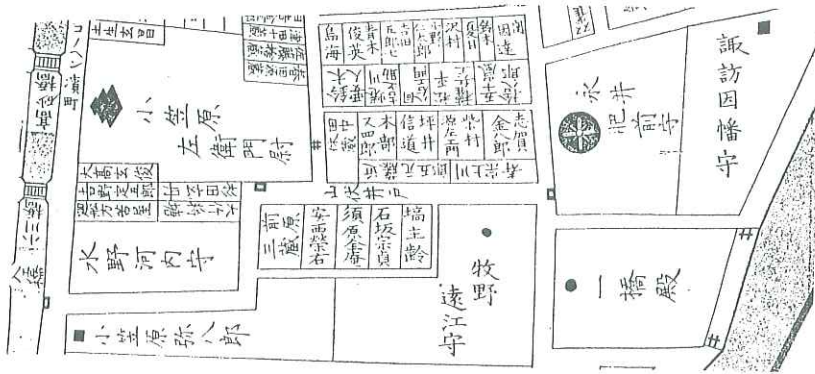
- ▲御直雇廻船御用達 大坂まびすし、筑前屋新五兵衛、江戸靈かんしま大川端
- ▲廻船御用達棟梁 大坂戎崎丁住居、江戸かいぞくばし坂本丁、大坂立売廻船助右エ門丁、江戸南新堀三丁目、大坂江之子編住居、江戸南散田町、細屋勘右衛門、広嶋屋平四郎
- ▲廻船御用達棟梁 大坂戎崎丁住居、江戸兵衛町小川橋、苦屋久兵衛
- ▲御廻米廻船御用達 大坂江之子編住居、江戸兵衛町小川橋、広嶋屋平四郎

とあるほか、私は苦屋について知るところはない。

した「金蘭遺臭」という書の中に、次のように記してある。

「大竹蔣塘、野州の人。郷は岩舟山陰に在り。故に又石舟と号す。蔣塘も亦、其の地に菰沼有るを以て也。名は培、字は達夫、斧八と称す。初め江都に來り、町方同心と為る。府伊の部卒也。性書札を好み、教えを菱湖に受け、頗る其の妙に詣る。是に於て、管を報つて身を立て、職を弟某に譲り、業を地藏橋に開く。尋いで山伏井に徙り、堂を心静と号し、書名頓に揚る。其の後西遊して伊勢を過ぎ、奥田三角の遺愛を觀る。元人海粟道人。行書横幅有り、世希世の逸品と称す。蔣塘流覽之際、心神恍惚、強いて請い、臨摹數日、大いに悟入する所あり。故に其の還るや書風一變、復卷家の旧姿に非ずと云う。安政五年三月十六日歿、年五十八。之を本所清光寺に葬る。」(原漢文)





明治六年四月二十八日「久松町三十七番地に劇場建設の許可を得て喜昇座と称し、開場祝を行い、明治十二年八月久松座と改む。」と物の本にある。すなわち明治座の前身である。

第5 浜町一丁目

諏訪因幡守・永井肥前守・一橋殿、三家の邸地のある場所は、正徳年中（一七一〇～一七一五）間部越前守に賜う所で、後世まで、河岸地に間部河岸（まなべがし）の称が残った。抱一上人の句に  
夕立や大名走る間部河岸  
と吟まれた場所である。

○諏訪因幡守

信州諏訪郡高島、三万石の城主。この地を相對替で手に入れたのは、当主忠成の時、安政六年（一八五九）五月であった。『藩邸沿革』にいう。

- 一、中屋敷 元矢ノ倉（浜町一丁目）
- 相對替、安政六年五月十六日
- 坪数二千三百五拾坪

相對替屋敷書抜 安政六年五月十六日、宗対馬守中屋敷、元矢ノ倉六百三十拾弍坪。本多主膳正下屋敷。同所千七百拾八坪。諏訪因幡守元。同人中屋敷、下谷金杉千坪、戸田采女正え、八方相對替。

〔「東京市史稿」市街編四九一六〇五頁〕

○永井肥前守 尚典

美濃厚見郡加納、三万二千石の城主『安政六年武鑑』に、御詰衆、三万二千石、はまた丁矢のくら」と載っている。

る。この地の拝領は天保十年、『藩邸沿革』に、

- 一、上屋敷、元矢ノ倉、
- 拜領天保十年六月五日
- 坪数三千三百四十五坪

屋敷書抜、天保十年六月十三日、津輕大隅守下屋敷、元矢ノ倉三千三百四拾五坪、永井山城守。同書、天保十年九月三日、増山河内守屋敷之内振替、元矢ノ倉弍百四拾坪余。（同前書一五三三頁）

○一橋殿。徳川家。旧封一萬石。

この下屋敷は寛政十年（一七九八）八月十日に拝領した。『藩邸沿革』に

- 一、下屋敷、浜町、

拜領、寛政十年八月十日。添地拜領同年十二月廿五日。振替、文化五年三月。坪数四千六百拾五坪。府内沿革圖書、寛政十年八月堀田相模守屋敷土ヶ地、民部卿屋敷二被<sub>レ</sub>進。同所、西統、間部主水屋敷被<sub>レ</sub>召上、添地被<sub>レ</sub>進、一屋敷二成。文化五辰年三月、東之方大川端道敷共囲込二被<sub>レ</sub>成、西之方有米之道之側、少し引下り、南北脇通り境之振替、新道出来云々。

一橋家記録、寛政十年八月十日御屋敷二成、同廿三日渡、元堀田大藏大輔下屋敷三千四百坪余、同年十二

月廿五日御添地二成、同十一月二年二月二六日渡、元間部主水屋敷千弍百拾四坪、総坪数四千六百十五坪。（市史稿四九一六三頁）

○山伏井戸

永井肥前守屋敷西方の二纏の街区、ならびに近隣の武家地は、総称して「山伏井戸」と称されていた。切絵図には、近藤元五郎の家の前に「山伏井戸」と記してある。ずいぶん名高い井戸であるが、埋められて、今はその跡もさだかでない。震災直後あたりまではまだ此処と指し示る目標は残っていたらしく、『浜町誌』に、次のように記している。

久松警察署前の電車路線、現在のオパーン自動車屋の前ところに山伏井戸というのがあった。之れは徳川氏入国の際に扈從して来た、紀州根来の山伏百人に対し、久松町一丁目辺に宅地を給与されたのであったが之を根来同心と称へた頃から専ら用ひられた井戸で、何時からともなく自ら山伏井戸と呼ばれることになったのだといふ。新編江戸志によれば、曾て水の濁った時に、山伏が来って祈り、清水を得たので名づけたのだといひ、又一説には、昔歯痛に悩んだ山伏が、此

の井戸に起請を籠めて全快したので此の名が出たのだとも言はれているが、此の井戸は菌痛に効験があるといふので、人々之を信仰し、つい近頃まで、常に井戸に蓋をして、その上に塩と揚枝とが載せてあったといふことである。

○川上宗寿 ○近藤元五郎 (未考)

○近藤吉左衛門孟郷の屋敷

近藤元五郎の名は、『安政武鑑』では検出できなかったが、明和と文化の頃、この辺に奥右筆の近藤吉左衛門孟郷という人が住んでいた。

『御府内沿革図書』『文化五辰年之形』の図には、切絵図の、田中休蔵・近藤元五郎・川上宗春の居所の個所に、田中吉蔵と近藤吉左衛門の名が記してある。屋敷の地形は少し変っているがこの近藤氏の地所を借りて、宝暦末年から明和初年にかけて、後に米沢藩上杉家お抱え儒者となった細井平洲が住んでいた。明和八年九月、上杉鷹山公が、帰国に先立ち、行列を整えて、ここ平洲の寓居を訪れ、米沢下向のことを請うたことが、森銃三先生の「細井平洲伝」に見えている。

(『森銃三選集』巻八、二五八頁)

○田中休蔵

『藤岡屋日記』の、安政の大地震の被害状況を記したくだりに、

一、山伏井戸近辺大破也。

一、進物番百田中休蔵潰れ候而、金之番人二人、十日程之間、五百文ツ、

二而頼ミ置、其後二百文ツ、二而頼ミ置候よし。

という記事がある。

○柴村源左衛門

『文政二年武鑑』に、「御腰物奉行百五十俵、はま丁山伏井戸」とあり、

『安政六年武鑑』に、「御小納戸衆、父源左衛門百五十俵、山伏井戸、馬」と

ある。『文政二年武鑑』に載る源左衛門は、柴村盛庸であろうか。通称は元次郎、また与十郎ともいった。逸見八左衛門義次の五男で、奥御右筆柴村盛方の養子となり、その女を妻とした。

天明六年二月二十一日はじめて凌明院(家治)に拜謁した。時に二七歳。

『寛政重修諸家譜』の編集に参与した人である。『安政二年切絵図』に載るのは、柴村主膳盛照かと思う。

○志賀金八郎

『御進物番、山ふし井戸、御書院番御小性組出役』(『文久二年武鑑』)

○松平権兵衛

『御進物御番、五百石』。『安政六年武鑑』に「はま丁、元矢のくら」

○蟻川八右衛門

『御小普請支配組頭、百五十石、矢のくら』(『安政六年武鑑』)

『相對替屋敷書拔』に、

弘化三年十月廿五日

神谷昇太郎拝領屋敷 小普請組水野式部 浜町蠅殼町式百坪 支配世話取扱

蟻川八右衛門

(同前書四一五三四頁)

○蟻川吉之助

『相對替屋敷書拔』に

弘化二年九月廿三日

蟻川橘之助拝領屋敷 小普請万近藤 浜町村松町式百拾五坪 織部支配

野本孫之丞

高百五拾俵

(同前書、四一五七三頁)

○鈴木要人

『安政六年武鑑』に「二之御丸御留守居五百石、山ふし井戸」

○板垣退助の寓居

『浜町誌』に、「明治十年以前、山伏井戸の間に板垣退助の寓居があった。草屋根の風雅なかぶき門などがあ

り、邸内には鬱蒼たる竹藪等もあって至極閑静な邸であった。」と書いてある。松浦宏の大小区分図によると、浜町一丁目七番地の所に「板垣」と記してある。切絵図の田中休蔵屋敷がその場所に相当するようである。

◇東京を語る会 第20回

日時 三月二十六日(土曜日)

午後二時—三時三十分

演題 「京橋・日本橋思い出話」

講師 藤浦 富太郎氏 (東京中央青果会長)

〔郷土室だより 正誤〕

6号	誤	正
2頁3段1行	菓園	菓園
2・3・4	菓園	菓園
11号		
3・2・21	菓研畑	菓研畑
13号		
3・2・7	魚荷押	魚荷
3・2・9	送り舟	押送り舟
3・3・23	最いて	書いて
14号		
4・3・27	五七七七	五五七六
15号		
2・2・14	村夕了阿	村田了阿
4・1・5	元保六年	天保六年
4・3・25	趣前	越前